

P-049

対応困難事例における患者 - 医療者間コミュニケーションに関する行動分析

福井赤十字病院 精神科

寺井 堅祐、若山 典子、中野 智子、堀口 朋美、
宿南 憲一

【目的】がん治療では、患者と医療者の間に、良好なコミュニケーションを築き保つことが重要である。両者の良好な関係性が、患者の満足度や生活の質を高めるからである (Ong et al., 2000)。医療者は、患者の語りを傾聴し、共感的態度を示すなどの医療行動が求められる。しかし、患者の対応に苦慮し、ディスコミュニケーションに陥ることは少なくない。本報告の目的は、ディスコミュニケーションに関与する因子を、主に行動的側面から明らかにすることである。

【方法】対象は、コミュニケーション不良の解決を目的として相談された肺癌患者2名である。患者-医療者間の言語的関わりと医療行動との関係に着目し、ディスコミュニケーションに至る経緯を継続的に分析した。具体的には、患者と医療者の言動をカルテから抜粋し、やり取りされた感情の質と、その後観察された相互行動の内容を整理した。なお研究に際して、個人が特定されないよう倫理面に配慮した。

【結果】ディスコミュニケーションの背景に、患者の医療者に対するネガティブ感情の表出が関与していた。患者から怒りやイライラをぶつけられると、医療者は動揺し、患者との関わりを敬遠するという傾向を認めた。患者の感情に巻き込まれ、患者に対する陰性感情を強めるという悪循環が形成されていた。これに対して、医療者が率直に自分の患者に対する感情を表出することで、両者のディスコミュニケーションは改善した。

【考察】患者のネガティブ感情の原因を医療者が自らに帰すると、コミュニケーション不良が形成されやすい。医療者が自分と患者の感情に注意を払い、問題解決的に行動することが求められる。また関係不良を解決できない場合は、精神科スタッフへのコンサルテーションが有効であると考えられる。

P-051

遠位固定型ステム人工骨頭置換術を用いた大腿骨転子部骨折のサルベージ手術

福岡赤十字病院 整形外科

瀬尾 健一、泊 真二

【はじめに】今回われわれは大腿骨転子部骨折術後にカットアウトを引き起こした症例に遠位固定型ステムを用いた人工骨頭置換術を施行した症例を経験したので報告する。

【症例】症例1: 82歳、男性。脚立から転落し受傷。右大腿骨転子部骨折を認め、¥-nailを用いた骨接合術を行ったが、術後1週のX線でラグスクリューのバックアウトを認め、以後、骨折部での内反、短縮を認め、カットアウトを生じるに至ったため、術後2ヶ月で遠位固定型ステムを用いた人工骨頭置換術を施行した。再手術後、大転子骨片の転位を認めたが、杖歩行可能である。症例2: 82歳、女性。車から降車時に転倒。右大腿骨転子部骨折を認め、¥-nailを用いた骨接合術を行い、術後2週で転院となったが、転院先でラグスクリューのカットアウトを認め、術後3ヶ月半で遠位固定型ステムを用いた人工骨頭置換術を施行した。再手術後4ヶ月の時点で疼痛は軽減して杖歩行可能である。

【考察】高齢者での大腿骨頭頸部骨折に対して、従来セメントシステムによる人工骨頭置換術が多く行われてきたが、近年セメントレスシステムによっても良好な成績が得られるようになり、セメント使用に伴う合併症に対する危惧もあって、セメントレスシステムの使用が主流になっている。大腿骨転子部骨折のサルベージ手術においても、セメントレス遠位固定型ステムの使用は、骨欠損部からのセメント流出の危険性がない点や近位部での骨折、骨欠損の影響を受けにくい点から有用と考えられる。

P-050

精神科病棟における身体的ケアと看護師の不安の関係 不安の変化の要因

諏訪赤十字病院 看護科

芳澤まゆみ

【目的】精神科における身体合併症患者の増加とともにケアの困難さや精神科で勤務する看護師の身体症状のアセスメントの弱さや苦手意識が報告されている。当病棟でも、身体合併を持つ精神疾患患者は増加しており、不安を抱えながらケアしている現状がある。そこで、身体的ケアが必要な患者調査をし、身体的ケアと看護師の不安との関係を明らかにし、身体的ケアに対する不安の変化の要因を見出すことを目的とした。

【方法】調査は、精神科病棟スタッフ21名を対象とし、2010年8月～2011年2月に行い、内容は8月と11月に患者の身体的ケアの分類・スタッフの不安度調査を行い、1月～2月に他科経験のないスタッフに未経験の身体的ケアへの不安の変化に関する半構造化面接を行った。

【結果・考察】当病棟の身体合併を有する患者の身体的ケアを8月と11月に比較した結果、身体合併症患者は4割を占め、身体的ケアは、11月は8月に比べ増加が明らかであった。身体的ケアへの不安は明らかだったため、不安のアセスメント尺度として開発されたSTAIを使用し調査した結果、両月とも半数の看護師が非常に高いレベルであった。しかし高不安を比較すると3パーセントのみの増加であり、身体的ケアの増加と不安の増強という関係は明らかではなく、他科経験のないスタッフに行った未経験の身体的ケアへの不安の変化における面接結果では{自己学習}{積極的他者支援}{想起できる}{主体的自己}の4つのカテゴリーが抽出されたことが要因と考えられ、自分が知識や経験のないことを踏まえ準備を行い、数少ない機会に学ぼうとする意欲が高く、受け身ではなく不安を軽減するため積極的に一般科経験のある看護師からOJT指導を受け、経験を通し、イメージを付け主体的にできることで、対処能力を高め不安の軽減につながっていたと考えられた。

P-052

Dual plateにより前柱後柱を再建した人工股関節再置換術の一例

姫路赤十字病院 整形外科

阪上 彰彦、青木 康彰、田中 正道、松岡 孝志、
野村 幸嗣、和泉 信治

人工股関節置換術 (THA) 後のソケット再置換術の中で、Pelvic discontinuityを合併している症例は治療に難渋することが多い。今回前柱後柱をDual plateで再建した後に再置換術施行した症例を経験したので報告する。

【症例】81歳女性。主訴:右股部痛。既往歴:平成7年4月右THA、平成7年8月右RevisionTHA (ソケットのみ)、平成8年左THA。現病歴:平成22年1月頃から特に誘引なく右股部痛出現してきたため、3月9日当科受診となった。レントゲン、CTでソケットの脱転と白蓋の大きな骨欠損を伴うPelvic discontinuityを認めた。白蓋骨欠損はAAOS分類TypeIbであった。手術計画は前柱後柱を強固に固定、再建した後にソケットを設置することとした。6月19日、前柱後柱をDual Plate (Locking plate2枚)と自家骨 (腓骨、肋骨)を用いて固定、再建した後、ModuRec systemを用いてソケットを設置した。術後3ヶ月目に連続して5回前方脱臼認めたが、以後脱臼は生じていない。現在術後1年経過したがソケットや移植骨の転位、圧壊もなく、杖歩行可能で経過は良好である。

【考察】Berry DJらによると、ソケット再置換術の症例でPelvic discontinuityを合併している頻度は0.9%と低いが、その再置換術は難しく、骨欠損が大きい症例は特に成績不良であると報告している。今回大きな骨欠損を伴うPelvic discontinuityを合併する症例に対してソケット再置換術を施行した。前柱後柱をDual plateと自家骨移植で再建後、ModuRec systemを用いて再置換術施行した結果、術後の経過は良好であった。